

鍼囊

一名歌詞三格例

下

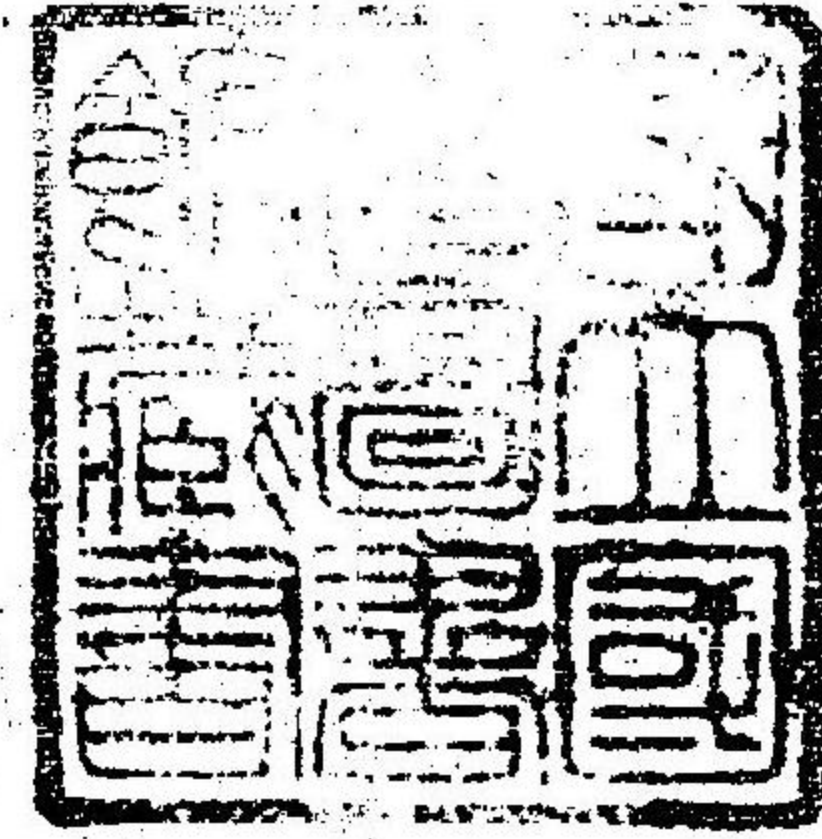
815.7
Kw323h



格外末

多行部	初丁
那行部	五丁
波行部	十五丁
末行部	十九丁
夜行部	二十八丁
良行部	四十二丁
和行部	四十五丁
何行部	四十八丁
疊辭部	五十四丁

絨囊下 格外末 目次 目一



245221

本語のまゝにいひて令する意をもとせしる例 五十六丁

日月月日といふことの辨 五十七丁

一の詞よていひうけて、二所ふてうけしる例 五十八丁

二の詞よていひうけて、一所よてうけしる例 五十九丁

二重よとゝのへしるてふをはの例 五十九丁

重なるてふをはの例 五十九丁

上へのへりて切る例 五十九丁

いひうけて、うくる詞をもとせしる例 六十丁

そらく詞をもとせて、體言よつゞけしる例 六十丁

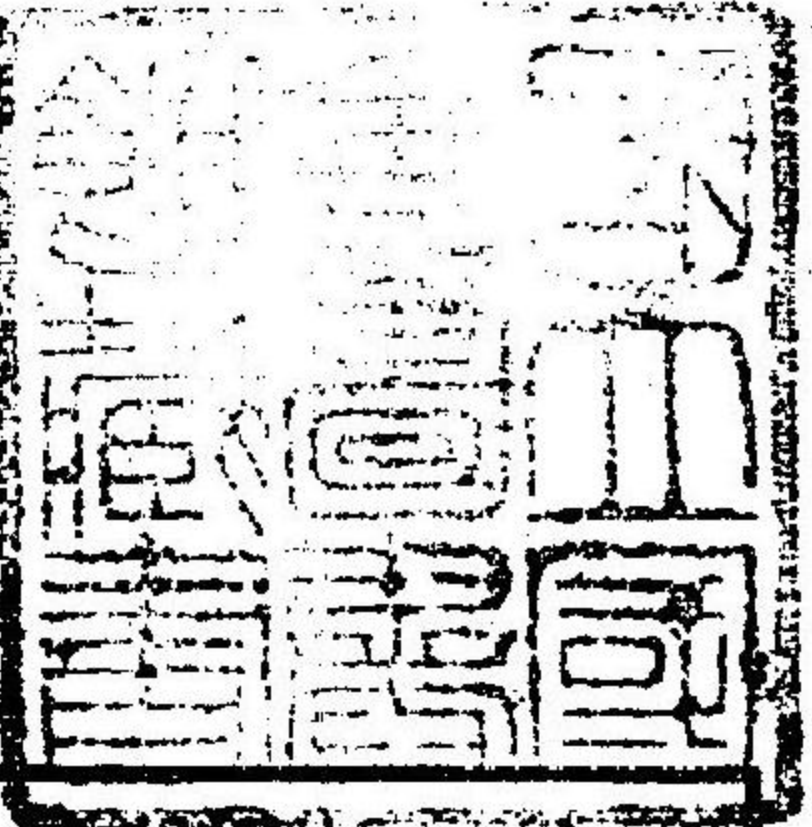
過去のことを現在の詞よていへる例 六十一丁

尾よつく詞を、第二句の頭よたける例 六十一丁

疑ふべきてふをはの例 六十一丁

てふをはあがへるよ似しる例 六十三丁

てふをはの訓を誤れる歌并今京より此方てふをはを誤れる例 七十丁

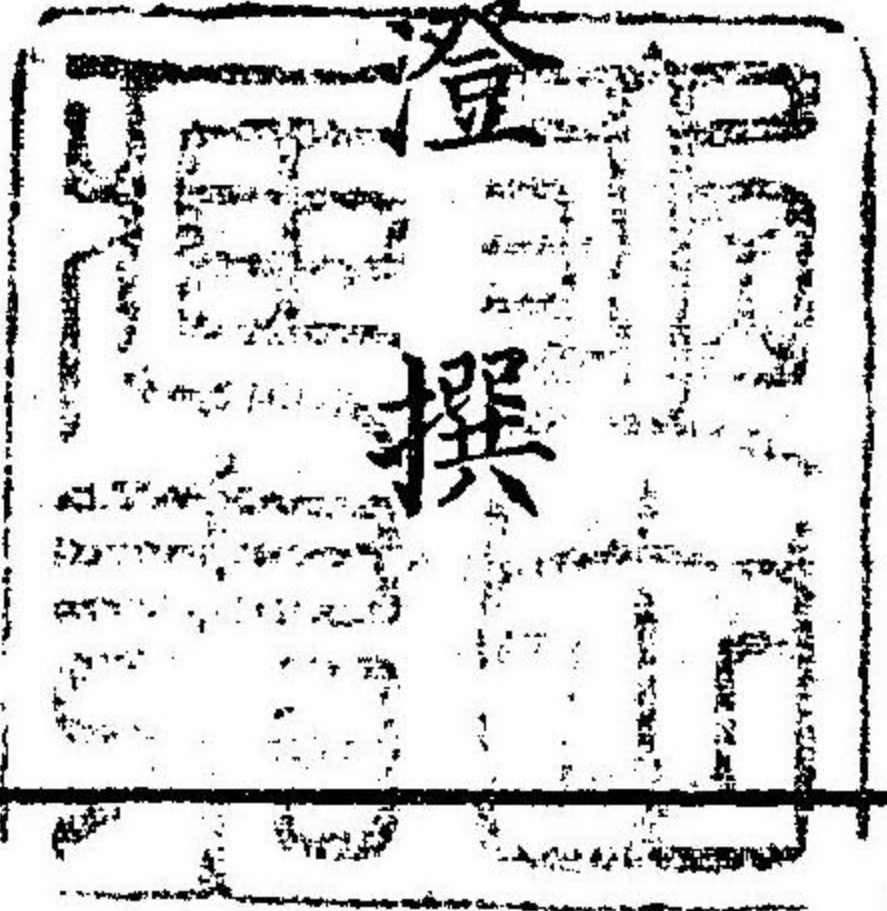


鍼囊

一名歌詞三格例

格外末

藤原雅登撰



多行部

頭ニオウ
多

上十字 多もとかりゆきみのほとみおもをまきとひそらならうつちいふれども
 同廿字 ことみいへをみるふあやき一すくさむこころけうらよあがむいまに
 七廿字 じぶらうゆいよあゆらひらきむさへふむなまよむよりかてまを
 四廿字 ^{長哥}あまたこのみちをあとほみ云々
 廿四字 いろぶらぐせなぶころむいそめまをみさのあがらうまをむのふりえ
 此外「多まくもふとくあといふも」も。せこそをりこ

鍼囊下 格外末 多行部 一

る言なるべし。

あめよ意
うめふ

五十一 多つのみをあれいむとめえあをふしーちんたあをんていんのい
續紀七 詔 ほろけのおおみこーみちまはるのちかひしつとちんーめーしん

つ

別格條よ出

つ_二近

五十二 うきむこびうきーうめあをんしんしんちかひしつとちんーなごる
古今七 かざが野よわのなつみつーうづよをいそころそかみぞあるらえ

つ_{きりつ意}

八十八 やまのまにゆきうづつーいさのちかひのかさやまのよそあけるあわ
古今十 たを山音よきつーあをんのよかしのんかすのんーちかひのあ

ての

五十三 あをちかぎうめとの花をさうかざーのみの後のちりぬとよー
古今九 うめの花ちかぎの後のあをんかざあかたのこのみ人れいからむ

ふて

一十一 かをのみのさしんからあをんしんしんちかひしつとちんしんちかひしつとちん
後撰十八 さまこといひーをのろをさのちかひしつとちんしんちかひしつとちん

びて

一十四 うづかざのなをなれいけさる露をけんと玉ぬくものよもび
古今四 あまをさきさきびらぬあせて鳴鹿のめよを見えずて音のちやけさ

てれ_{ちあひ意}

十五 ちかぎのあびーいんらうーあをんちかひしつとちんしんちかひしつとちん

と_二意

六十四 さすだけのおおみちのいんしんちかひしつとちんしんちかひしつとちん
古今十 志る野ちかひくまのかさけさけのまきぬーあをんしんちかひしつとちん

と_{きりつ意}

十七 うめれ花みやまこきみふあつとよあかくのみきみい見れごあの上せん
古今一 けかざのあまのゆきとぬらあまーきんさげあつとよ花と見まーや

と_二意

一十二 にちあづよ船のりせんとしんちかひしつとちんしんちかひしつとちん
一十三 いのちかひをまもいんかまのいんちかひしつとちんしんちかひしつとちん

又一種

古今十 人志れぬ花ひやさごとあーかたのまぢのけぢるああよーのなま

の二種

同五 こがまじるかまぢらひすむらぶあまはらよそのちりこまぢあま

そ二換

十四十 ちまけ野あそのかたらよーまぢさうゆとちまよなまら、こりま
廿三 ちまけ野あそのかたらよーまぢさうゆとちまよなまら、こりま
廿四 ちまけ野あそのかたらよーまぢさうゆとちまよなまら、こりま
廿五 ちまけ野あそのかたらよーまぢさうゆとちまよなまら、こりま
廿六 ちまけ野あそのかたらよーまぢさうゆとちまよなまら、こりま
廿七 ちまけ野あそのかたらよーまぢさうゆとちまよなまら、こりま
廿八 ちまけ野あそのかたらよーまぢさうゆとちまよなまら、こりま
廿九 ちまけ野あそのかたらよーまぢさうゆとちまよなまら、こりま
三十 ちまけ野あそのかたらよーまぢさうゆとちまよなまら、こりま

事ヲシテ

八 ちまけ野あそのかたらよーまぢさうゆとちまよなまら、こりま
廿四 ちまけ野あそのかたらよーまぢさうゆとちまよなまら、こりま

意合テ

古今一 ちまけ野あそのかたらよーまぢさうゆとちまよなまら、こりま
同二 ひまの見一まぢあまら花けらまぢ見とちりまぢらあん
廿三 ちまけ野あそのかたらよーまぢさうゆとちまよなまら、こりま
廿四 ちまけ野あそのかたらよーまぢさうゆとちまよなまら、こりま
廿五 ちまけ野あそのかたらよーまぢさうゆとちまよなまら、こりま
廿六 ちまけ野あそのかたらよーまぢさうゆとちまよなまら、こりま
廿七 ちまけ野あそのかたらよーまぢさうゆとちまよなまら、こりま
廿八 ちまけ野あそのかたらよーまぢさうゆとちまよなまら、こりま
廿九 ちまけ野あそのかたらよーまぢさうゆとちまよなまら、こりま
三十 ちまけ野あそのかたらよーまぢさうゆとちまよなまら、こりま

古今五 ちちやぶら神代もきのび立田川からくれなるよみぐくるとは
 同十一 あーがものささく入江のあらなみのあらぎやひとをかくこひんとは
 十四 甲 ふーのねれやとちのまぢをいよづりといひけふよまぢきぬ
 十三 甲 ふびとどまぢびよなりぬいのもがませーころむにあつきかけり
 と云をとふといふいつねなり。と云バをとふと
 いへどをとへどと云こと耳るれぎまバあげつこ
 のとへを古今よりこなとよいてへと云り。とふを
 後よてふと云と全同例なり。古今よ。今さらよとふ
 べき人もおもやえず八重むぐらして門させりて
 へ拾遺よこれのちや子もさるてへバ高砂のをの
 へよこてるまつも子もとり。など見えたり。

とふ

中三廿
 紀皇極 うづまぎふかみもかみきんさくもさるものかみさくもきんさくも
 後撰六 よの中いさよいさやがの音いあまは秋さふくもつとすれ
 四 甲 ちとせふおんさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
 十五 丁 あまぢていひさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
 鎮火祭 祝詞 この七日よいつらでてかろまはことあやとをみさるるととき云々
 續後紀 わきなるとてふびやいなをらんちむ木おはのゆるとまきんげんまひてん
 万葉以往の歌よとてと云ることかゝ。そのゆゑハ
 どののみ云よとての意をもちされむなり。古を考
 て知べし。古今よりこなとよい。とてと云ことつね
 かり。やゝ古くハ右よ引さるのみなり。

中三廿
 とむ

とむ
 重

とて

とふ

紀継体 長哥
 十六 丁 しのせしをなせのしよぶこ鳥きみよびか(せよ)のふけぬとふ

織囊 下

五

十五廿三 かなづのまつ葉見つあはしんちをかりませのひらぬとふ
同廿四 ひんばりみあてとくまむおけんかくりまむひひらぬとふ
十九廿 かなづのまつ葉見つあはしんちをかりませのひらぬとふ
廿廿三 かなづのまつ葉見つあはしんちをかりませのひらぬとふ

な行部

歎息
かな

記景行 あかてぬさうしーながしきららけのぼあーよゆくな

同應神 ^{長哥} あくしりなとめさうしけいんぷらーな

紀仁徳 ^同 やさみーるが大王うぐぬくをぬをぬをなニ

四廿三 大ぶののおもひのきみきぬいながら我をこひんなあまあまじよ

十四廿 あまをぎのちつたきぬのうらやさーのうらやかたな見ぎんるーみ

同六廿 うめの花それとも見えさる雪のうらやけんなますつかひやらを

十七廿 かなづまあおちの枝ゆきてかば花をちらんな玉と見るまで
十四廿 かなづけぬまぐらーまじいさーまじらけもなありつみれが
同六廿 まんりやいのひらうのうらやがはなうーたかなぬおんいぬお
廿廿二 かなづのうらやなきんうーかたをいひすなちのきーいお
七十廿 家よーて我いひんないさみ野はあちがうんよてうーしよを
廿廿 かなづのうらやな見さるーいぬをぬいさるうらやな
後撰三 いぬのうらやな難波るあーのうらやのうらやみづーな
伊勢物語 いぬあされなうらやなうらやなうらやなうらやなうらやな

ふな

記景行 ^{長哥} うななまーまむまむいぬのけせろなまひのせよニ
紀仁徳 ^同 やまみーるが大王うななうらやなうらやなうらやな

織囊 下

な行部

六

廿五 廿六 廿七 廿八 廿九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

なほり

十 廿一 廿二 廿三 廿四 廿五 廿六 廿七 廿八 廿九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

なほり

十 廿一 廿二 廿三 廿四 廿五 廿六 廿七 廿八 廿九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

なほきふ

三十九 ころがちちまきみのなほきふやまめいぬのしちしうまへんちかたけしんか
四十 ころがせしんわのなほきふしんあらしひむむびつちかたけしんか

なふ

四十一 ころがせしんわのなほきふしんあらしひむむびつちかたけしんか
古今十一 あぢぢののきをきけ原志のぶともじふらめやふいなる

なほ
ど三通

三十五 いそなほしぢあけしんあらしひむむびつちかたけしんか
續紀四 ころがせしんわのなほきふしんあらしひむむびつちかたけしんか

この詞文よハハと多し。歌よ件の一首のみなり。但
其も何時奈毛とあれど何時志毛の寫誤よもやあ
らんとおわゆさてこれを今京よりこあたよハハ
んとのみいひて文章よいと多き詞なり。歌よハ古
今十よ。あもとよりそなれて玉をつまめちこれ
かんそれとうつせ見んる。六帖五よ。つれよな

よの涙のながるらん人なんむれをおもふともか
まきぢもあま見えとりてよさをのこしのハハ
づれもどと同ト格あり。

願
なん

八廿一 いもがみそのちむさのなんかまきぢ花立ぢれをしちしちらひ
ナ廿一 せだもあらしんかまきぢのなんしぢいふのこふんかまきぢ

西廿一 ままぢの野まおんかまきぢのなんしぢいふのこふんかまきぢ

九廿一 こまのこふんかまきぢのなんしぢいふのこふんかまきぢ

ナ廿一 こまのこふんかまきぢのなんしぢいふのこふんかまきぢ

ナ廿一 こまのこふんかまきぢのなんしぢいふのこふんかまきぢ

一十三 ぬのちまきぢのなんしぢいふのこふんかまきぢ

廿廿一 うちなびんかまきぢのなんしぢいふのこふんかまきぢ

古今五つまればかかれおちるころけなきひとのころるよ霜をたのなん
 後撰七 いとふ入よとびねをきれびはとせむり昔のころもをうれよかきなん
 これらも第一位の阿韻よりつづきこり。

十五 ちろくの袖不敷而宿ぬを玉のこよひをはやもあけがあけなん
 古今土をることばきゆるこちりけ残りなへきみぶがうらうりれまけなん
 同十八 人志れぞおわかごろをはるのまみちち出てきみがめふもええなん
 後撰十四 志ら雲のゆくべき山もをだまらず思ふういよもかせりよせなん
 同十四 さをうけつしまさこひを高砂のきのくはふまらまうもれなん
 これらハ第四位の衣韻よりつづきこり。万葉よハ
 件の十二の巻も見えとる一首のみなり。たのづの
 られこと歟。

願
な
も

十四 七 かつつけぬきどののうらうらぶひもさふもころいあそなもひころのみて
 十九 本 あれのみきけむさうもかてんぎすぬのおまへういぬまな毛
 十九 本 きのくみちまかたかたさしもひつしおん毛しほひつしおん毛
南ノ誤

ね
た
な

十五 七 ちのさのくふうこのみんびゆきよきうらぬまみをめぐみしめたな
 佛足石 このみちちようづつ光をそあちいづせむひんかひんまはなきんひまな
 続紀十五 詔 ひつしひつしむせもめまをたふしたてたおがめすとこら

ね
小

十五 七 しいこのままびんやあきあへんうらわかくのたふしきとまを
 十四 七 このみちちあちああらふこされもあれももちまぎひらひらに
為小意
 十五 七 たもふころもまらんよにかひこそまのころうらあまきとすとも
 十五 七 かふるたもふく見せんよいつみのたまつちら玉ひりひてゆりのな

十四 ぬき玉のしるしをぬきしむる事
十五 ぬき玉のしるしをぬきしむる事
十六 ぬき玉のしるしをぬきしむる事
十七 ぬき玉のしるしをぬきしむる事
十八 ぬき玉のしるしをぬきしむる事
十九 ぬき玉のしるしをぬきしむる事
二十 ぬき玉のしるしをぬきしむる事

物を述
小

十五 ぬき玉のしるしをぬきしむる事
十六 ぬき玉のしるしをぬきしむる事
十七 ぬき玉のしるしをぬきしむる事
十八 ぬき玉のしるしをぬきしむる事
十九 ぬき玉のしるしをぬきしむる事
二十 ぬき玉のしるしをぬきしむる事

を意
小

十五 ぬき玉のしるしをぬきしむる事
十六 ぬき玉のしるしをぬきしむる事
十七 ぬき玉のしるしをぬきしむる事
十八 ぬき玉のしるしをぬきしむる事
十九 ぬき玉のしるしをぬきしむる事
二十 ぬき玉のしるしをぬきしむる事

を意
小

紀神代 ぬき玉のしるしをぬきしむる事
同天智 ぬき玉のしるしをぬきしむる事
同天智 ぬき玉のしるしをぬきしむる事

を意
小

記崇神 ぬき玉のしるしをぬきしむる事
同天智 ぬき玉のしるしをぬきしむる事
同天智 ぬき玉のしるしをぬきしむる事

を意
小

赤深齋 ぬき玉のしるしをぬきしむる事
同天智 ぬき玉のしるしをぬきしむる事
同天智 ぬき玉のしるしをぬきしむる事

ぬ
の

加行部よ出。

ぬ
の
も

上と同。

願
ね

紀神代^{長哥} かこちよあみさうりこーめろよーよーよりこね

二廿丁 といら立かひーうりのこもだちなまゆみのをのふまびのりこね

來ねをこねといへること万葉よい猶いと多しこ
れい第五位の於韻よりつゞけなれとるありある
るを。

後撰十九 きみが代いつるのこかりよあえてもね^來たがたあまのこゝろひやん

と第二位の伊韻よりつゞけとること後なり。

記神武^{長哥} しんさざのみのたかむんもーひまむいんかちのたかむんもーひまむいん

十丁 きみごぞいかこみよせとあが二入うろーまじのたままをまらぢね

新古今 玉のをよんそまづめとね^來なむのびんぎのぶのこつわつたぞとせ

これらい第四位の衣韻よりねとつゞけたり。

紀崇神 りもちけむのこゝろのいあむんもまかーひらゝね^來むのいふとせ

記仁徳 ひさうそあめよかけもりのゆんちやあむんけけいもとらさね

十一丁 しんせむんかろかこしんらかやんべんかむんかのたかむんね

九十号 かないごんちあひもくごんもむのちあむんもむのちあむんね

十九丁 たんあまのやじのしむもしんひのたかむんね^來むんもむのちあむ

同廿丁 あくら川せむつむせむせむんらむんもむんもむんもむんもむんも

此五首の「とらせ」のらせあどらふよねの願ひ詞の
そとりとるあり猶此例多し。「とらせ」のらせあどら
ふととり給へのり給へといふ意ありさてねの言
ふ連くふひられてせを第一位の阿韻のさよ轉し
ゆるなり。

廿四丁 あいむのたかむんもーひまむいんかちのたかむんもーひまむいん
廿五丁 ちんさむんもむんもむんもむんもむんもむんもむんもむんも

五廿丁 あぢぢのんむちかひんむちぶんむちぶんのむちんむちんむちんむちんね
廿廿丁 あぢぢのんむちかひんむちぶんむちぶんのむちんむちんむちんむちんね
同四丁 ねのむちのむちんむちんむちんむちんむちんむちんむちんむちんむちんね
十八丁 ^{長哥} どのむちりあひてあぢぢむちね
五廿丁 ようじよじよむちむちむちむちむちむちむちむちむちむちむちむち
十九丁 ^{長哥} つきみひまかむちあぢぢむちむちむちむちむちむちむちむち

紀安康 れぢぢむちむちむちむちむちむちむちむちむちむちむちむちむち
これらゝ第一位の阿頼よりねとつゝむちりむちり
るを。

後撰十 れぢぢとつゝのめとつゝあぢぢのむちむちむちむちむちむちむちむち
拾遺六 あぢぢとつゝむちむちむちむちむちむちむちむちむちむちむちむち
亨八 ^{詞書} 今のこれよりかへりねとつゝのめとつゝひけるむちりむちりあぢぢ

などあるいゝむちらねならねかへりねといふむち
をかくりへるい後なりこの外まゝねをまちねの
とねをまちねゆねをゆきねなどやうよ云とい
づれも三代集よりことなこのことよて古よあらむ

そね

九十九 あぢぢよーむちむちむちむちむちむちむちむちむちむちむちむち
十九丁 うつゝもめとつゝあぢぢのむちむちむちむちむちむちむちむち
二四丁 なむちむちむちむちむちむちむちむちむちむちむちむちむちむち
十九丁 大宮の内よむちむちむちむちむちむちむちむちむちむちむちむち
此らゝつねあぢぢとのみいふところを其下よねの
そむりころなり。

ねば

記上 ^{長哥} あぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
紀天智 たみの子ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

一種の

四廿一 大ぶねをこぎのきいぬいさかひかいらんかむらぶちをよけて

同廿二長哥 わらわんらぬおのちかへねんらんかひんらぶねのしん

九廿三同 ちんかひのちかへぬいさかひのちかへぬいさかひ

同廿四同 ちかへぬいさかひのちかへぬいさかひのちかへぬいさかひ

七廿五 みむろのそむかむらひのちかへぬいさかひのちかへぬいさかひ

六廿六長哥 もの鳥のちかへぬいさかひのちかへぬいさかひのちかへぬいさかひ

廿廿七同 山見むらぶちのちかへぬいさかひのちかへぬいさかひ

續紀長哥 のちかへぬいさかひのちかへぬいさかひのちかへぬいさかひ

同廿八同 のちかへぬいさかひのちかへぬいさかひのちかへぬいさかひ

ちかへぬいさかひのちかへぬいさかひ

これらの用言を體よまへてのしんらぶね

用言ニシテ

七廿九同 ちかへぬいさかひのちかへぬいさかひのちかへぬいさかひ

六長哥 ちかへぬいさかひのちかへぬいさかひのちかへぬいさかひ

五同 ちかへぬいさかひのちかへぬいさかひのちかへぬいさかひ

四同 ちかへぬいさかひのちかへぬいさかひのちかへぬいさかひ

三同 ちかへぬいさかひのちかへぬいさかひのちかへぬいさかひ

二同 ちかへぬいさかひのちかへぬいさかひのちかへぬいさかひ

一同 ちかへぬいさかひのちかへぬいさかひのちかへぬいさかひ

凡て用言よりつづくのハ万葉よりくんとより

つづくよかぎれり三代集よりこなよハ猶さま

さまの用言よりつづくける歌ありきよくよ

らぶね

こよ通
のみ

長哥
續後紀

つみのえすよわくはたはくはこそねのひきすべびやのみきりいませ

は行部

はも

四四下 うつろをさかまはぢあのかをよしよんかみのちをびんせり
五五下 長哥 しるそちなげひんらんうさのすかむしかもるーん

六六下 うらめ〜んみふたかあひのいふしすいふまほびみ〜めぢ有ける

尋ル意
はも

記景行

七七下 こねつはつむの野よむゆるさのあはらうさるんきんみまも
八八下 尋ル意 かくのみよ有けるものぞんげの花かきいあひちんびりきみまも
九九下 高いうらの日のみいのもづよにんよきらちま島のみやを
四九下 あめしちとよぶ久〜んままたんこなひてあり一家のよはをも

歎息
はや

記上 長哥 うたのせるしまのみまもつみまもつよおな〜んまよんや

同崇神 同 こそぢみまもつひびんせやみまもつひびんせやみまもつひびんせや

同景行 倭建命御詞 おつよまもや

同 をこのこのよのたま〜つらまのしちその〜んや

紀雄畧 長哥 いひ〜んみまやあ〜んみま

記神武 同 あ〜んびんせやあぬ

臧囊下

は行部

十六

紀推古 長哥 さきだけのきんぎょやなまきん

拾遺 まみのまむかしのしぎまのゆへんかへちまごよかたりみーや

しうば 三廿二 やましくんまのゆきーいんまのあまのいさづいあひーくらま

なば 古今五 もろこーも夢よ見ーいんまのあまのいさづいあひーくらま

てば 古今五 くれのみちよまうぐひまと鳴とびんいものころけをなとちりな

りせば 十五廿 あまはまのまのいんまのあまのいさづいあひーくらま

はッ重 十五廿 あまはまのまのいんまのあまのいさづいあひーくらま

ませば 十五廿 あまはまのまのいんまのあまのいさづいあひーくらま

しせば 十五廿 あまはまのまのいんまのあまのいさづいあひーくらま

ふせば 十五廿 あまはまのまのいんまのあまのいさづいあひーくらま

はッ重 十五廿 あまはまのまのいんまのあまのいさづいあひーくらま

十三四丁 いまをあれはなほよきまはあす一とたまひのちやまはけんむな
八廿丁 ともをいませるよはつらぬとみちのちやまはあすみんれびく
古今四 りつとをきりつものよど物思ふこのかぎりなりける

は 云残シタル

記仁徳 長哥 りつが見がかりくはせむらまのちやまはあすのあしり
九廿丁 ともをいませるよはつらぬとみちのちやまはあすみんれびく
古今十 青柳をかく糸よよりつらひきのぬよどかたうめれなむ

ば ヲ 加

四三丁 しまんものうらひやまはたへ バ あはあのよひのこまうげこぬ
八廿丁 ともをいませるよはつらぬとみちのちやまはあすみんれびく
十三九丁 長哥 たもへ バ ろもむねをせからぬこふれ バ みまこらやれんきま
此外あれ バ やなれ バ やこふれ バ やゆけ バ やくれ

バ やのめ バ やきれ バ やなけれ バ やゆるせ バ や
らせ バ やるがとけ バ ろいとひまこぬ バ ろあれ バ
ろもあろぬ バ ろもいとへ バ よろあらん バ なねがこ
ふれ バ どなふごとあれ バ ど天地もよりてあれ バ
こそ戀みだれ バ こそこのらせ バ こそかくこふれ バ
こそたもへ バ こそこのろあれ バ こそこひけれ バ
こそい バ ちけれ バ こそふる雪のちへよつめ バ こそ
などいへる類万葉よを多し。

ば 種 加

記上 長哥 さよむひよあり バ ともむひよありかよせ バ 云々
五廿丁 とも バ ろろの遠きさのひつらとせれ バ まのつらませ バ 云々
一廿三丁 玉藻なすうらふなをせれ バ そをとるとちんく バ 云々
二廿三丁 同 あまづいりひ バ ねれ バ 云々

十四 見まへつゝのせふのまへくちらよあぢのうみのあはたのたがらまゝかりてな
 十九 見まへつゝのせふのまへくちらよあぢのうみのあはたのたがらまゝかりてな
 古今三 いづらよ行ていまぬる物ゆまよみまへつゝのせふのまへくちらよあぢのうみのあはたのたがらまゝかりてな
 同十九 あひ見まへつゝのせふのまへくちらよあぢのうみのあはたのたがらまゝかりてな
 四三 かぎら山あさつらつものわねいなく見まへつゝのせふのまへくちらよあぢのうみのあはたのたがらまゝかりてな
 十五 見まへつゝのせふのまへくちらよあぢのうみのあはたのたがらまゝかりてな
 十六 あひ見まへつゝのせふのまへくちらよあぢのうみのあはたのたがらまゝかりてな
 廿四 かねてこが花ごうもちてつらつら見まへつゝのせふのまへくちらよあぢのうみのあはたのたがらまゝかりてな
 古今十七 ここのせふのまへくちらよあぢのうみのあはたのたがらまゝかりてな
 拾遺六 雪をうきみかきねよつめるからなづあぢのうみのあはたのたがらまゝかりてな
 廿五 うちいさすみぢこのいとよつげまへつゝのせふのまへくちらよあぢのうみのあはたのたがらまゝかりてな
 二十三 じぶをうふねが雪ふねつたかすらのあつちよあぢのうみのあはたのたがらまゝかりてな

まへは

まへの

四三 つかよふいかにいざちゆけとひあうらをぞせしゆのまへくちらよあぢのうみのあはたのたがらまゝかりてな
 廿五 あまきらーゆまもふらぬいちうく此いづらなふちらまへくちらよあぢのうみのあはたのたがらまゝかりてな
 廿四 じぶをうふねが雪ふねつたかすらのあつちよあぢのうみのあはたのたがらまゝかりてな
 廿五 うちいさすみぢこのいとよつげまへつゝのせふのまへくちらよあぢのうみのあはたのたがらまゝかりてな
 廿六 いざこふいかにいざちゆけとひあうらをぞせしゆのまへくちらよあぢのうみのあはたのたがらまゝかりてな
 廿七 らんすゆあまの川のけよどめらぶゆゑもあぢのうみのあはたのたがらまゝかりてな
 九十五 よー野川かたもみこのみこぎのうらを見すらあぢのうみのあはたのたがらまゝかりてな
 十六 いまだよめなとちめをあひみずとこひんやーつきひきうけまへつゝのせふのまへくちらよあぢのうみのあはたのたがらまゝかりてな
 三十四 角ささふいその道を朝さらぎゆきけん人の思ひつかよひけまへつゝのせふのまへくちらよあぢのうみのあはたのたがらまゝかりてな
 万代よこえととねせひてかよひけん云々

まへ

まへ

まへ

まへ

十八廿^{長哥} 一きよそつものことあきよひよきみとをまむちうちなげき
かろけまけい云々

件の三の巻まるを舊本と通計万四波とあるハ誤
なり。今ハ類聚抄よ。四を口と作るによりて。ケマク
ハと訓てひけり。

まど

紀仁徳^{長哥} よろまどきかたのくまべうよろほひゆくのともか

同齊明 やまこえてうみまるともたわーちまらるきのうちんをくらゆまど

廿五廿 ほりごころかまほまどたけくけらまみひんうらまらゆまど

七廿分 まるなむちゆげのかやらううま本のおららまどまどちんあらあひ

美赫
み御

紀武烈 ねちきみのみおびのまつそむまじかまか一人もあひおひあひ

一七丁^{長哥} こもよみこもまどくーもよみくーもまひのまらまらまらまら子云々

同八丁^同 みとらーのあづさのゆみれ云々

十三廿^同 みとらーをつるぎのいけの云々

一十分^同 みくろをよー野のくおれ云々

五十三^同 みてづらたのーしまじ云々

同十三^同 こゝたむきよもあつともかひのせいがいんあいのみこつちよあああむ

廿三^同 つくさねのよびんまよものまらあれまらみいけーはあまほ

廿廿丁 かせはちるたれ立花をそてようけてきみぢみぢあとおいづつのも

廿五廿^同 あきまほほるのらごもねねともきみぢみぢあひのつあうらてバ

此外「みらみ」「みよみ」「いくさみ」「ことみおやみ」「み
こみ」「さみ」「みをこみゆこみふでみをこみなますみ
るをさどの類めづらーのらず。

用言ニシテ
み御

記垂仁詞 その後のみびぎをまくらきてみねまーき
二廿九 みるーまのありそをいまみれをたひざりーくさおひよけるあ
續紀十詔 大さきのをめらみことかづらきのそつひこのむきめいそひひ
のみこと皇后とみあひまーて云々

美称
み真

廿廿 まとちくの野よもあそあんころなぐさこのみなのかあ入おせまらも
同廿九 うらみよりつちのーのさかせんあなまひひらにらふらふらふら
此外「みよー野みくま野みくらみちまぬしよ」
の類めづらーのらだ。

キ故ヨ
み意

一廿九 うつせみのいのちををーみなみひひつらひのまてむおのつて
三廿三 ねなるよのゆめををのびまじらぬつたのあまのまのつたの
これい上よをとい入り。
三廿四 こーのうみねのゆひがうらをんびまーて見れらぬのーまおまーぬひつ

キ故ト意
み

古今五 さわ山のなそのせみちちりぬみキ故ト なる人見よひつらひのしれのげ
これい上よをの言なーあるもあきも同ト意あり。
廿廿三 をめらきのかみのみあごをかーこみとちちらをさくばあまみのと
一廿九長哥 わちきみのみことかーこみおまびまーらんをたかひん
これも上よをの言れあるもあきも同ト意あり。
てこれらかーこみりかーこまりてとらふ意あり。
かーこき故よときていんちあふんがくり。

クニ
み

廿廿三 つまもこをあひくらーめーひつちんそんひのあまひんうらめーあまひ
三廿三 あちがちらちちあまーあまひんひんあまひのあまひのあまひのあまひ
金櫃上 二高みかたがうらるるの川まーのあまひんあまひん
同 やまをむみころまうらまーちらーあまおんあまひのしんじあまひん

この金槐集まるも、件の万葉の例よりてよまれ
とるあるべし。かの右大臣は、古を慕ひてよまれ
ること多ければなり。されどこの「聲高みハ聲高く」
山さむみハ山寒くとあらまほしくこそたかゆれ
新續古今よ。をのけ聲のさやけみ聞ゆるいと
あるも、聲のさやけくと云意よていそれとるま
るべし。

みん、意

十三甲子 ちゆうしのきてけつめれをみてあらつばまにやぶらるるも
十六甲子 さゆり花ゆりもあをんとおまへこそ、いまのまよあもうるべし。みそれ
土左日記 こちあーみーて云々

西行撰
集抄

いづくよやまみする人よこのこづねまよ云々

みかん、意

十三甲子 あーひきのいとよそーみまがのねをひがくみとあめのみぞゆめ
十五甲子 いもよあをばあらばまなみいねおむいこまの山をこえてぞあぶくる
古今正 ちれまきまおいでこひむ名ををみまよひものむまがれつ

後撰六 ちぐれちりやうなびいふ見せもあずちりなびをみるあきはぎ

自餘のみの言ハいづれも既な然るうへのことみ
云るよ。これらのみは、ひのバ「あらバ」こひバ「ちりな
むなど。上よ味然ことをいへる詞あれバ。みなから
んとて。と云意よまのずしてハ。上よかあをぬこと
あり。いづれも上よ。味然ことを云る詞あるみハ。此
定よ心得べし。ああるを今までこの差別あること

を辨へ知とる人まくいて山高みなどのみとひと
つよ心得來でとるい古よくと一からざるが故こ

き述

十廿三 ちつせがいのちみちを結びあげてあまぎやうばのひきまを
金槐下 きみが代よなちをのびていしきよみあまきけみさりのかげをまへん

一種

八廿九 なるの野はきげみまけるひめゆりのきりきねこひんこーまをのを
十七廿一 やまぶきのもげみびんごうごのこまをちんごのちんごのちんご

源氏葵

あさみよや人のおりつらうがかりみもそちづまごちんごのひざを
後鳥羽院 御集 雨をちむ雲のうきみきゆつきのかけおちるる夏のよはこら

り意

十廿一 ねかづらいまをらうらうらうのみるみいりのみつけひんご
十二廿 あづさゆみひきみゆるみおまひ見をきんごうらうらうのひんご

六帖三

あふこといなみの池のむづなれやんえみあえむみごのへぬらん
後撰八 かみやつきうらみちらずみだめきまぐれそ冬のをどめなりける

ん意

偏格條よ出

めど

紀武烈 たかきみのやへのくみまかめどもなをあまよみかぬくみのき
十廿一 いそのへおあふあーびんごらめどたすまき君があつこといせん

同十

あづさゆみひのぐまふへよらめどもめちけくろをさうかてぬらも
十廿五 ありちがしありなをちめてゆめめどむいんあふいよあーみせん

古今ニ たるごとに花のさのりありなめどあひんことをいのちなりけり

真意

記上 同
みくびごまの緒もゆらよらうゆらうて
ねなとももゆらよあめけまな井よあうまうていん
くよのむなごのころのもなや

拾遺三 水のたむよてる月なみをかぞふれんこよひごもあしのむらなりける

榮花五 御堂の御前のもなるよ舞臺ゆたせて

も^ん意 偏格條よ出

も^ん息

二十今 きなみの國つみ神のうらさびてあれさみちみればかあも
六廿九 ふるさこのあすのいあれが青みよーならのあまのをみらくーも
三廿一 ねく山のいそとすげさねあめめてもまびーらりこまればあつも
同十今 ものふれ八十九川のあーるあふらさみよのゆくへあらばも
五廿一 うめの花ちらまききーみの園のよのさあーらうぶひすなも
七廿一 春あすみ井のいゆよみちのあはさみあまんとしんあつらも
廿廿一 野へ見ればなぞーの花まじりあつらあまのさあつらあつらも
廿廿一 ちりえんそとあま里まてあつらける君のあつらあつらあつらも

も^ん歎

古今五 あー下よりくもあまきーてゆく雁のいや速さあつらあつら身かなーも
拾遺二 なくきすなへやちりきのみのみーのよもひらりーあれがあつらあつらも
十廿一 山とはきみさこあーあつらさあーあつらあつらあつらあつらあつら
六廿一 ちりえんそとあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら
十廿一 かぜあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら
同廿一 大船よあーあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら
十三廿一 ちりえんそとあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら
十三廿一 ^{長哥}くたくもあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら
四廿一 つくーあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら
八廿一 やみならびらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら
十廿一 さなはだあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら
十廿一 ちりえんそとあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら

も^ん輕

十郎 ちぢくちぢくふらふら〜ちぢくちぢくちぢく
同 ちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢく
此の外も「ちぢく」「ちぢくちぢく」「ちぢくちぢくちぢく」
ゆもなどの類多し

軽
も

十四 ちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢく
十五 ちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢく
十六 ちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢく
同 ちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢく

も
か
意

も
か
意

十一 ちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢく
十二 ちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢく
十三 ちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢく

も
か
意

十四 ちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢく
十五 ちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢく
十六 ちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢく
同 ちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢく
十七 ちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢく
同 ちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢく
十八 ちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢく
十九 ちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢく
同 ちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢく

も
云
残
光

十三 ちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢく
十四 ちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢく
十五 ちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢく
十六 ちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢく
同 ちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢく
十七 ちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢく
十八 ちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢく
十九 ちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢく
同 ちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢく
二十 ちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢく
二十一 ちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢく
二十二 ちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢく
二十三 ちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢく
二十四 ちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢく
二十五 ちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢく
二十六 ちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢく
二十七 ちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢく
二十八 ちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢく
二十九 ちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢく
三十 ちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢくちぢく

も
重

鐵囊下

若事 ちまのいひこも見えむさしひひかまのむけちまゆまのふれむ
 後撰五 これちこのゆくむかしくむのわしきもみくらぬもあふれのせせま
 一廿一 一ころまへんころのちまはたむのちまみちのちまもみくらぬ
 二廿五 ^{長哥}かみをのけよのちみちをけちまのちみちみまあまもむめ玉ま
 三廿三 けちのちまもや川のちまらざかたつたへ瀬のちまもあふらん
 八廿四 いまもちま大城のよほとぎは鳴とよむらんあまなけれどち
 古今二 いまもちまほくらんちま花の小島のちまはゆるがまのとな

一種
も重

もよ

紀顯宗 おまめもよあまのたまあまきよひのちまがいつて見えまもあふ
 一七下 ^{長哥}こまもみちまらふこまよみかこまさふん
 これらの體言よりつゞきなり
 記上 ^{長哥}あいまよめかあれづい

紀顯宗 あさぢうらをそねをまきまこづつたあまのちまはちまのちま
 五七下 ^{長哥}よのちまのちまのちまのちまのちまのちまのちまのちまのちま
 十四下 あがのちまのちまのちまのちまのちまのちまのちまのちまのちま
 これらの用言よりつゞきなり

もや

紀顯宗 おまめもやあまのたまあまきよひのちまがいつて見えまもあふ
 これの體言よりつゞきなり
 二下 くれいもやちまみこちまのちまのちまのちまのちまのちまのちまのちま
 記顯宗 あさぢうらをそねをまきまこづつたあまのちまはちまのちまのちま
 紀皇極 をばちまのちまをひまれとせひのちまのちまのちまのちまのちまのちま
 これらの用言よりつゞきなり

も
イヒカケ

三甲九 いまのちま ^{キヨ}ちまのちまのちまのちまのちまのちまのちまのちまのちま
 金葉七 ちまのちまのちま ^{ナシ}ちまのちまのちまのちまのちまのちまのちまのちまのちま

や行部

問カクル
や

記仁徳長哥 そらみつちまのくみかひごとんかん

二十九 ほくぎひたてこきちやうの花はれしるるをのよんせむひんをため

二十 ちまんのまゐらふひんをさるのせいのせんじけーのわい

同廿三 ちんせ川のちみやせをせむびげてあるちやせんやんちん

菅万 かつらの日せうらーいびぬるせいの音ちあひたれんをせん

古今四 つまごゆる鹿ぞなくあるをみやうーおのらすむ野の花ときらさ

後撰四 かぎたらぬちのちまんのちんぐいんがくれのまげん

同
や
も

十甲十 あーひちのちあひのちんせんせいと聲ちんのおちやと田ぬゆち

十一 ちよねのちえんちんひんよてまてのちんぐいのち見えん

おカクル
と
や

十十六 ちんちやよちんちんしんてははらあやと日ーあらなよと

同廿四 ほんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

同 あれこそいふちあらぬちちちちちちちちちちちちちちちち

紀武烈 ねみのこれやへのからあきゆらせとちみ

後拾遺 ちまき木んちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち

と
や

十十四 かむいみのちまーちんちんちんちんちんちんちんちんちん

十四 ちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち

二十 みるちをちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち

同 あらちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち

佛足石 ちんちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち

三 ちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち

おカクル
や

三 ちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち

鐵囊下

や行部

や何

十廿一 ほとけすましなまじふちをちのきちる庭を見ん人やこれ
同廿二 あらしまのやいのひげがどむとよもあつたれをどふ人やこれ
廿三 ひとりのほめけあひをさかどちよめののろくまぎずてける人やこれ
廿十 ありひきの山よゆまけん山人のころもあらずやま人をこれ
十廿卒 くらまきのひさすまののぞつむちのやまのちまはあひひ子やこれ
新古今 ねぎの花まそでよかけて高まどのをのけみちよいれあやこれ
赤深若衛 門兼 浪きんかぜままのせてゆく船の帆がげり見ゆるむらつるやこれ
三廿一 こもてらんやと。こびんかのんびん山をひいてきつけり
四廿一 こもあつてらんやと。こびんかのんびん山をひいてきつけり
八廿一 こもあつてらんやと。こびんかのんびん山をひいてきつけり
古今一 ちものすみこちやうてみす野のよすのちまあゆきまのつ
同十七 玉づりのふるめやうづらふらふらぎの磯のちみつけなきよこたけり

及ル意
や

四廿卒 うつてらんまのこのすのし見んちののろくまを
十廿卒 あじさゆみまののり野よどづりする君がゆづりのろくまと思へや
記仁徳 やまこいよやふまもげしてよんかれまをひつかりすれや
十廿一 わちまごをちるらん野よかひののろくまのつひあづるひあれたすれや
一廿卒 むらしたのちやふのろくまのあひんまののろくまののろくま
廿四卒 あちどりのたまなまが川いんせぬこひ君よかをひんこつてあや
同廿九 見んとしならんあふやあめの花よひまをまどひ君のれんね
古今五 うるうあハ秋なまあまのちあは花こそちらめ根せんらめや
同墨滅 やまあのなこのしおの音もな人のちよぐへんらんひやも。

同
めや

同
れや

紀神功 めまももらんらんわのめそわのめあゆまのろくまのろくま
西廿五 うたせらん根やらんこまがももあはれら君せんあゆらんらわ

臈囊下

九、十、十一 あぐりかす人もあれやもぬれ衣を家よにやらなまびの志るゝナシト云意。あ

古今十九 旋頭 春さけ野へよまづ咲見れどあうぬ花まひきふらふあのみき花の名かれや花名非云意

けや はらや意 九、九、十 ところへよなつふゆめけやかところもあまふれぬちまじこまじいこ

せや せはら意 四、廿、十 あぐたむいさいとみあらせや玉一げいらまもけつらめふとせゆ

へや ひらや意 四、十、十 真野の浦のよしのきさへひゆもたのやふも夢あーとゆる

めや めはら意 十、十、十 みづこのいめこそたむもこひのちのめやまぬのたむいせむらこ

れや れはら意 六、廿、十 ゆの原よかくあへづらひのうごごへんかよふとれや時のこのすすくへ
七、廿、十 まぢみでづ入ぬ磯のふちぢれ見らへせいあへんかふんのたがき

古今四 秋の野よたくちら露の玉なれやつらぬきかふるくものいこまぢ

えや えはら意 十、十、十 いなもをむわりのまあへゆらまづまかち見えやもあれむらるん

げや げはら意 十、十、十 ぬをいすまのよふのいめを見えつげやそとあすひもくあふらふんを

ねや ねはら意 十、十、十 旋頭 しのむらあひのあひさんせかこまむらひのつらぬ我なほぶらうのいせまは

へや へはら意 紀元恭 せしーいすもなまへんか。らんひらうら女のそまかのよのらあひさ
三、四、十 かまのせむせんしせせなむせんせまのいんまのいんかや

れや れはら意 四、十、十 長哥 あひらうらまのいんかあひらうらあは家のあひらう我止見れを云
六、十、十 玉藻わらうらまのいんかあひらうらあは家のあひらう我止見れを云

七廿字 いんらの小野のあまづよ立てる雲やーもあれや時をーまらえ
続百六 ゆめのこぞらびりたあゆむまぢのなふいどあはれ又やちむると

はや

上四字 こころやーたあへんあはれさうかへんきんがやまきぬらうあしりまけんらん
古今四 ひたしめのしものさへいさあまけんあはたかなさうかへんがやんりまぢるらん

はや

は行部よ出

はや

上よ同ド

をや

わ行部よ出

や

四廿字 まゆふさびんびーなかくんやまうかのくひんさむいんかーをらぢる
九十九 やうよふあひびくたのわんあまうささひんあひんあさうさ

三廿字 おちくおちくおちくさあやうさうさあまうひらまやーいよな
六廿字 やまへんさあまあまうさあまうさあまうさあまうさあまうさあまうさ
記上詞 天のうづめの命海鼠みひけらんこふちあらんせぬロといひて云々
古今十 あーあものさづへ入江のちら浪のちらすやひとをかこひんとは
同十九 たむへどもあまなびのみのあれたらあや思をーああふひひな

のや

紀継体 いらぬゆふそんまのながあまのわ たのらんへんあそあまのなる
六廿字 ああみのやあまのわあまのわあまのわあまのわあまのわあまのわあまのわ
二十九 いそみのや高角山のこのまもつあぶらそそをらまぬいらこの
十四十六 みなこのやあーがなるあまうさあまうさあまうさあまうさあまうさ
古今廿 ああみのやがみのやまきんぞあはれかねぞ見ゆきまみの千とせそ
拾遺志 いのかのやうかの沼のらうかてこひきまひとをいまひとめ見ん

なるち

記上長哥 あめさるちたしめさるのうなびせさるんまのみすまる云々

三十一 何めさるちひしちのいへあむるまむひはけあちらんきも

十六世下 何めさるちさらののさむまちのちかづのちかづららうづらさるんも

續紀廿一童謡 かつらぎ寺の前たのちをさらの寺の西まのち云々

催馬樂 竹川の橋のつめなるちをさるのよつれきとぬちあめさるんべんて

まじち

二廿下長哥 かこまぢみさるつこのる云々

九廿下同 かこまぢかみのみさあふ云々

十三世下同 かこまぢかみのこらり云々

廿廿下 かこまぢみさるかみかみさるのさるんて

同廿下 かこまぢ何めのみさるかつれねのこさるのさるんて

八廿下長哥 うねまぢさるんまは云々

十三下 うねまぢさるんまは云々

佛足石 をぢまぢおむまぢいれおむまぢいれおむまぢいれ

二廿三下長哥 このさるち何めのみさるげあめさるひのみさるげ云々

十六世下同 あまてらむひのけみかさるひつらからうすよつまねさるち難

波のをさる云々

記仁徳同 たてらちあまのちまは云々

廿廿下 おてらちなまのしよりあまのひまは云々

六廿下 ぶんさのいんちかさるおさるちあまのちまは云々

記仁徳長哥 つぎねちあまらうのちまは云々

ふち

二廿下長哥 あまのちかからのみさるん云々

四廿三下同 あまのちかからのみさるん云々

ぶち

八廿三 長哥 あまごぶちひたの〜キハコ

十廿今 あまごぶちひたの〜キハコ

記仁徳 いのゆへちちちちひたのみおまひびね

くや

十六廿辛 たきゆへちちちちひたのみおまひびね

や

記神武 長哥 うづの〜キハコ

や

同仁徳 同 志があまひこひたのみおまひびね

一廿四 ふぢをらの大みちの〜キハコ

十廿五 あら〜キハコ

紀雄畧 みちよあちち〜キハコ

や

童謡 續紀廿一 櫻井よちら玉〜キハコ

三賢録 同 ひこのまむる田〜キハコ

や

五廿六 たるの野よな〜キハコ

十四廿十 とねやまふ〜キハコ

同廿九 さを〜あけふ〜キハコ

十六廿辛 ゆかつひちま〜キハコ

記允恭 さ〜ちみう〜キハコ

同履中 おちさのよ〜キハコ

同雄畧 みしろよ〜キハコ

古今十二 ゆづ〜キハコ

十八廿辛 まうふ〜キハコ

や

や

長哥 紀神武 かむあせのいせの〜キハコ

記應神 同 ちた〜キハコ

あをー、をどめニガ

三寶録童謡 つがまむる田やちぐりあせりまむーや

紀武烈 ねみのこのややからあきゆさせとあみこ

又一種
や

五長哥廿九 ちめつちひいろー照いどあがしめ照いどあがりぬるひつきいあー

や

三呼カク廿九 ときよこやあをこまひらすまひのふゆとふゆかよひとふゆかや
三長哥廿九 ときよこやあをこまひらすまひのふゆとふゆかよひとふゆかや

や

四長哥廿九 かのせのこやとりのあまぢーなうんせれあまぢーなうんせれ
十六長哥廿九 ぶんをちやまのあまぢーひそをちやまのあまぢーひそをちやまのあまぢーひそを
十九長哥廿九 ゆめよるなひとやなふみそねゆき

記上同 やちかこのかみとあこやあがたかくぬーこそいニガ

同 詞 うつこーきあがなまゆのみことやニガ

同 垂仁同 このときまの池はすめるときやうけひおちよ

む

九童謡廿九 ちちねのそのみことのことさげをのをあがくののみまぎんや
熱田縁起 あゆちがひあみあねこいマれんとことさるらんやあをれあねこそ
續後紀童謡 玉の児のをを引まらみ牛車いよけんや

後紀 いちへの野中ふる道あらこめがあらこまらんや野中ふるみち
古今十 浪のうろせみれ玉をみだれけるひろをぞよはるれあらんや

やは

續紀詔 七 こを以てあれ一人やいこくとき大瑞をうけんまをらむニガ
同同二十 可問賜ものよやいあらんとたもあせどむニガ
續後紀 わきなとこむびやをらんこむむ木もさのゆるとまよぶまひてん
古今十九 ねむひけんひとをぞともあむたままーままーやむへいさのつけりやえ

按、やハと云ること古くも宣命ハ見えとれど、
万葉よりあるこの歌ハいなし、但九廿八丁、松反
四臂而有八羽云々、とあるのみあり、志られども、其
歌誤字多しと見えとれば、信がとし、十七、麻追我
弊里之比尔底安礼可母と云歌あれば、八羽ハ八母
の誤ならんと云説あり。

下知上意 九廿丁 松反四臂而有八羽三粟中上不來麻呂等言八子

按、万葉なるハ誤字多しとたかゆれば、このみか
とし、呂ハ追字の誤とて、尾句待と云よ子と使の童
よ下知一とるありと云説、志をらくよりて引つ

や重 十廿丁 くれなるのきぞ引みちを中よまきとつれやかよん君やきるはん
古今十曲 きみやこんんやゆのいぎよひまきとのいごむはむねよけり

一種 四四丁 か〜てやなちやまらりんちうらぬみちあひらそをぢづみまきとて
七廿丁 か〜てやなちやおいなんみゆきふるたかちき野のまぬあちらんよ

十四丁 か〜てやなちやなるんたかあききのいさのわのけあちらんよ
貫之集 ちぶねとやいひやちらま〜白雪のそよひつちなひんかひまぬらん
此等、いや、の重ねさまよのつねのといかたりと、
このや、い、かろく心得べし。又

十六丁 長母 うち〜のちま〜あれやほ〜ちま〜けな。かひのいさのいさちよや。
たむされてあらん云々

此、いや、を三重ねと、このや、い、かろく心得べし。

やの
重

か行部よ出

や
云残ニカ

記仲哀^{長哥} このかあや^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ}

二十分 これおのさあま^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ}

十五辛 これおのさあま^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ}

伊勢物語 これおのさあま^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ}

後撰十七 かねたけいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ}

古今一 かねたけいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ}

や

記上 ああま^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ}

二十分^{長哥} よ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ}

三十五辛 かねたけいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ}

あ
あ

五十六辛 うめの花^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ}

け
あ

三十四辛 かねたけいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ}

五十五辛 うめの花^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ}

六十二辛 かねたけいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ}

あ
あ

十六辛 かねたけいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ}

あ
あ

五十四辛 かねたけいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ}

六十三辛 かねたけいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ}

十九辛^{長哥} かねたけいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ} けいんのかあ^{ナリ}

よ 意

西三丁 さいさんのまげかみのかたへんじつめゆのなをなせむかひのあへん

より 意

四廿三丁 あへんよりみづくるまはたのじふもへななくのまのまの(まの)のまの

より 意

廿七丁 やまのこのまののあまをうまかたにせむのあまのあまのあまのあま

詞書 記崇神 うなをらをてらて船よりたむくれ云々

同 同安康 詞書 播磨守は侍けるとき三月がより舟よりのがり侍けるよ云々

よ 同

記景行 あさむえをらうーなづむをらうゆまあーよゆぐぬ

廿七丁 まづのこのまのまののつみ井のつみをーまてんかひのあまのあま

より 意

廿九丁 あひいもももあへんよなななまのまのまのまのまのまのまの

廿五丁 なつのも見づーよりあひ見てらひまのうらひよたもわゆ

古今一 色色ニマサリテノ意よりむ香こそあそいとむかゆれむがむふれやどの梅ぞも

拾遺 古ものがりやけんよー野山山ニマサリテノ意よりのまよとひなるひが

五十九丁 くもとくくまろとむよみやこ見づかーまあなみあこまゆな

よ 同

記雄畧 長哥 やほふーこまづものみやニク

同 同清寧 おふをよーまびへあまよまのあねらうらうらけんまびつこまび

紀仁徳 長哥 あをふよーなうらまをまじん

二四丁 同 あまのよーまのまののまの

十二丁 まつろよーまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

四廿丁 長哥 あまのよーまのまのまのまの

紀景行 とーまのまのまのまのまのまのまの

五十六丁 はーまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

ら行部

らく

十五 十 ちかきみんびくしをさかーとあむしをみせさーく
 十六 十 ちあーひきの山田まるをちあひのまむしをのなわいひくちあ
 十七 十 みまあにけるるーちあひのまむしをのなわいひくちあ
 十八 十 ちあらびのさうをけちあもむしをのなわいひくちあ
 十九 十 あらねすひにさかたむしをのなわいひくちあ
 二十 十 ちあめあむしをのなわいひくちあ
 二十一 十 ちあらぶの野ちあもむしをのなわいひくちあ
 二十二 十 ちあみよららさむしをのなわいひくちあ
 二十三 十 ちあかむしをのなわいひくちあ
 二十四 十 ちあむしをのなわいひくちあ

らゝ

古今七 ちくら花ちりうひくわれ老らくのこといふなるみちもいひ
 同十七 老らくのこといふせががきーとらういひもいひも
 因よいふ万葉なる老良久い見らく隠らくなどの
 らくよ同くくるの伸正とる詞まることあらをあ
 るを古今なるいあが老といふことを老らくとい
 へりときこえとりかくて後くよい又この古今あ
 るよ本づきて老らくと云ること多くその詞か
 の老良久惜毛よりいでさればおゆるらくとこそい
 ふべき雅言の定格なるをおいらくといひ入る
 ち後よ唱をさへ誤りくるものなり。

らゝは

十五 十 ちあらむしをのなわいひくちあ
 十六 十 ちあらむしをのなわいひくちあ
 十七 十 ちあらむしをのなわいひくちあ
 十八 十 ちあらむしをのなわいひくちあ
 十九 十 ちあらむしをのなわいひくちあ
 二十 十 ちあらむしをのなわいひくちあ
 二十一 十 ちあらむしをのなわいひくちあ
 二十二 十 ちあらむしをのなわいひくちあ
 二十三 十 ちあらむしをのなわいひくちあ
 二十四 十 ちあらむしをのなわいひくちあ

らんき

四ノ里九 ちんちんわのんまのんちかばなけいんまのんいんまのんかまのんかまのん
六ノ里十 ちんちんわのんまのんちかばなけいんまのんかまのんかまのん
七ノ里十 ちんちんわのんまのんちかばなけいんまのんかまのんかまのん
八ノ里十 ちんちんわのんまのんちかばなけいんまのんかまのんかまのん
九ノ里十 ちんちんわのんまのんちかばなけいんまのんかまのんかまのん
十ノ里十 ちんちんわのんまのんちかばなけいんまのんかまのんかまのん
十一ノ里十 ちんちんわのんまのんちかばなけいんまのんかまのんかまのん
十二ノ里十 ちんちんわのんまのんちかばなけいんまのんかまのんかまのん
十三ノ里十 ちんちんわのんまのんちかばなけいんまのんかまのんかまのん
十四ノ里十 ちんちんわのんまのんちかばなけいんまのんかまのんかまのん
十五ノ里十 ちんちんわのんまのんちかばなけいんまのんかまのんかまのん
十六ノ里十 ちんちんわのんまのんちかばなけいんまのんかまのんかまのん
十七ノ里十 ちんちんわのんまのんちかばなけいんまのんかまのんかまのん
十八ノ里十 ちんちんわのんまのんちかばなけいんまのんかまのんかまのん
十九ノ里十 ちんちんわのんまのんちかばなけいんまのんかまのんかまのん
二十ノ里十 ちんちんわのんまのんちかばなけいんまのんかまのんかまのん

らんち

らんよ

らん種

らん加

記仁徳 ^{長評} ちんちんわのんまのんちかばなけいんまのんかまのんかまのん
廿九ノ ちんちんわのんまのんちかばなけいんまのんかまのんかまのん

同十三ノ ちんちんわのんまのんちかばなけいんまのんかまのんかまのん

りみゆ

三ノ里十 ちんちんわのんまのんちかばなけいんまのんかまのんかまのん
六ノ里十 ちんちんわのんまのんちかばなけいんまのんかまのんかまのん
同廿十 ちんちんわのんまのんちかばなけいんまのんかまのんかまのん
廿五ノ里十 ちんちんわのんまのんちかばなけいんまのんかまのんかまのん
十六ノ里十 ちんちんわのんまのんちかばなけいんまのんかまのんかまのん
七ノ里十 ちんちんわのんまのんちかばなけいんまのんかまのんかまのん
同 ちんちんわのんまのんちかばなけいんまのんかまのんかまのん
記清寧 ちんちんわのんまのんちかばなけいんまのんかまのんかまのん
十ノ里十 ちんちんわのんまのんちかばなけいんまのんかまのんかまのん
廿十ノ里十 ちんちんわのんまのんちかばなけいんまのんかまのんかまのん

る加

織囊下

わ

三十一 長寄 みのかしづくまかたみゆたき 八咫鳥の詞 紀神武 天つ神の御子汝を召しおわいさわ

ゑ

四十二 山のまもあぢむらむ 夢語 紀天智 及びろゝゝゑなまぎのむとせりのむと我のこゝろ

ゑや

五十三 よのなまのうひびー 夢語 紀神代 あなふゑやえをこを

おゑ

三十四 むらちねのそま 夢語 紀神代 むらちねのそま

ゝゑや

三十五 ねむまのま 夢語 紀神代 ねむまのま

頭三十一
を

三十一 あかす 夢語 紀神代 あかす

三十二 あらむ 夢語 紀神代 あらむ

三十三 こむ 夢語 紀神代 こむ

三十四 ねま 夢語 紀神代 ねま

九四甲 天地よりあらそいでいづが大王もまをさるゝもてぬ一もをんぞ

物を意 ^{長哥} 記景行 ひつりまのひつりまのつがひなまてま一もをんぞかま一ぞ

三四甲 あまのつらぬいふもたれぬのいふもたれぬいふもたれぬいふもたれぬ

三三乙 あられぬか一まのなまをのいふもたれぬいふもたれぬいふもたれぬ

古今七 うた一もをたふいふもたれぬいふもたれぬいふもたれぬいふもたれぬ

意 ^{まの物} 記上 やつりまのつがひなまてま一もをんぞかま一ぞ

七乙一 たつりまのつがひなまてま一もをんぞかま一ぞ

三四甲 たつりまのつがひなまてま一もをんぞかま一ぞ

三乙一 あ一もをたふいふもたれぬいふもたれぬいふもたれぬいふもたれぬ

古今十 あまのつらぬいふもたれぬいふもたれぬいふもたれぬいふもたれぬ

同五 たら露のつらぬいふもたれぬいふもたれぬいふもたれぬいふもたれぬ

よ近 ^{長哥} を 記景行 をつらぬいふもたれぬいふもたれぬいふもたれぬいふもたれぬ

紀雄畧 同 つがひのつらぬいふもたれぬいふもたれぬいふもたれぬいふもたれぬ

同應神 みつりまのつがひなまてま一もをんぞかま一ぞ

勢 ^勢 を 三四甲 ほつらぬいふもたれぬいふもたれぬいふもたれぬいふもたれぬ

古今四 たつりまのつがひなまてま一もをんぞかま一ぞ

云 ^云 を 記景行 かたがへつらぬいふもたれぬいふもたれぬいふもたれぬいふもたれぬ

紀允恭 とう一もをたふいふもたれぬいふもたれぬいふもたれぬいふもたれぬ

十三 ^{長哥} 下 もみち葉のつらぬいふもたれぬいふもたれぬいふもたれぬいふもたれぬ

一 ^種 を 四世五下 まつりまのつがひなまてま一もをんぞかま一ぞ

古今七 めづり一もをたふいふもたれぬいふもたれぬいふもたれぬいふもたれぬ

十四 昔 しのなるのさきをはりかむのさきのさきかすさきさき

十五 昔 ぬさきのさき見へるさきさきさきさきさきさきさき
記履中 おかきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

十六 昔 ともさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき
十五 昔 さきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

十七 昔 かみし野のさきさきさきさきさきさきさきさきさき
十八 昔 さきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

十九 昔 花のいろを雪まきまきと見えさきさきさきさきさき
二十 昔 さきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

二十一 昔 さきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

二十二 昔 さきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

二十三 昔 さきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

二十四 昔 さきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

二十五 昔 さきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

二十六 昔 さきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

二十七 昔 さきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

をや

ナサナ 本の人ほくぎすをわめづら〜いもやなご〜いひくをれだ

何部

何の

四廿ナ しのぶりのおもひけめ。きまてくのまゝのなつるのよを見えこ〜

ナ四ナ かみかきも西の間のおるはるのちかきあはるの御たぢよからま〜

古今五 むづこののや〜きあれたるあき霧のちかきあはるのちかきあはる

同十 花ごの小あはるちり〜かたまたまのちかきあはるのちかきあはる

何等の下よやご〜つ〜け〜な〜る〜ら〜い〜な〜あ
なごいふこと常よ多きを言せ〜ん〜もあける
こと件のごと〜

何の

四廿ナ おひなひのよを〜るのちかきあはるのちかきあはるのちかきあはる

同五ナ あひなひのよを〜るのちかきあはるのちかきあはるのちかきあはる

五、九ナ ^{長哥}おひなひのよを〜るのちかきあはるのちかきあはる

ナサナ 同 おひなひのよを〜るのちかきあはるのちかきあはる

九廿ナ 同 おひなひのよを〜るのちかきあはるのちかきあはる

ナ廿ナ おひなひのよを〜るのちかきあはるのちかきあはるのちかきあはる

ナ四ナ おひなひのよを〜るのちかきあはるのちかきあはるのちかきあはる

古今ニ ぬれ〜るのちかきあはるのちかきあはるのちかきあはる

同十八 おひなひのよを〜るのちかきあはるのちかきあはるのちかきあはる

同十九 ちよもけし山を〜るのちかきあはるのちかきあはるのちかきあはる

山の紅葉を見〜るのちかきあはる

件の歌ごものごと〜め〜る〜る〜る〜るの下の

あゝのくはにさゝかゝる

^{わか}何 十六幸 うまゝのうまゝ ^田あゝのくはにさゝかゝる

古今十 ^田あゝのくはにさゝかゝる ^田あゝのくはにさゝかゝる
件の歌どまゝ。まゝとさゝかゝるまゝ。まゝとさゝかゝる意
されば。その下のまゝのくはにさゝかゝる。まゝとさゝかゝる
也。

^{他ラ云}何 十六幸 ^田あゝのくはにさゝかゝる ^田あゝのくはにさゝかゝる

古今十 ^田あゝのくはにさゝかゝる ^田あゝのくはにさゝかゝる

^又何 十六幸 ^田あゝのくはにさゝかゝる ^田あゝのくはにさゝかゝる

古今十 ^田あゝのくはにさゝかゝる ^田あゝのくはにさゝかゝる

^重何 十六幸 ^田あゝのくはにさゝかゝる ^田あゝのくはにさゝかゝる

古今十 ^田あゝのくはにさゝかゝる ^田あゝのくはにさゝかゝる

^{同カスル}何 十六幸 ^田あゝのくはにさゝかゝる ^田あゝのくはにさゝかゝる

古今十 ^田あゝのくはにさゝかゝる ^田あゝのくはにさゝかゝる

何とも

十四丁 *何ともいふ事はない*

何の事もない
なふせん

四十五丁 *何の事もない*

十六丁 *なふせん*

十六丁 *なふせん*

後撰十五 *なふせん*

何の事もない
なふせん

四十六丁 *なふせん*

五十八丁 *なふせん*

支今由 *なふせん*

なふす

四十七丁 *なふす*

同廿三丁 *なふす*

何ぞ

八十三丁 *何ぞ*

十三丁 *何ぞ*

拾遺 *何ぞ*

新喜六 *何ぞ*

何等の下 *何ぞ*

くぞ *何ぞ*

てむ *何ぞ*

何ぞ

五十八丁 *何ぞ*

一 *何ぞ*

十五丁 *何ぞ*

紀継体 *何ぞ*

何ぞも

三平 ふきんぶつあなりのせんときーかあおぞひきみの見とこげらん
西井 ゆひけよこよひとのらるるがせなうあせぞひこひーちきまぬ
これらハ何等の下よやびてつづけとぞもといへ
るなり。

何ぞも

四井 よくもるひとんーよもあつちをいつのあひごもあびてひつる
ま今一 いちよりも香こそあれとたわゆれぬぞぞぞぞぞの梅ぞも
これらハ何等の下よ言をへててぞもとおける
なり。

なすあ

さ行部よ出

いつの

上よ同ト
いつのまゝと待意なり

十七廿二丁長哥よおとゝきすまならん月よいつ
しものまをやくなりあん云くとあるもその時よい
つらなりあんと待意よ云るなり。かんハ願ふ意の
かんよハ非ず願ふ意なりバならあんといふ定格
なるを。なりといへるあらハ。なんハつねのなんあ
り。上よいつのまゝといひて。下よ願ふ意のなんとう
くること。古よハさらよなきことなり。後撰一よ。松
もひきまわれもほまむなりぬるをいつのまゝさく
らそやもさあ。あん。拾遺十九よ。いつのまゝつくま
のまつりとくせ。かん。つれなき人のなぐのかむ見
ん。あどあるいつのまゝ。いつのまゝと待意より轉ひ
て。いつのまゝやらんをやくといふよいへるあり。

件のうち十三八丁なるを舊本は月日とかきこる
て下上は寫し誤るものありまれ字は泥
むべきは非ず他の例よりてひつきと訓べし。

二十廿一 ひとひのほめーらーぬるまみゆを月ひのまらずひのさるも

四十廿一 きつひのそとまひてかろまん月ひをよみてゆきてこまを

十五廿一 くとまふらひいやー君がかう月ひをあらんまのきらあく

同廿一 はろたれのうろろまよあひみ月ひよみつひもまうらんぞ

十五廿一 長哥 なみのうゆなが月ひきよてあらんまの月ひもきんぬを

十六廿一 いでこー月ひよみつ云く

廿八廿一 あら月ひよみつ云く

二十廿一 あぢご月ひのまねぐらぬれ云く

三十廿一 同 いつな月ひよつと花ぬわるまみか云く

廿九廿一 つま月ひえりあひてあれ月ひのれまくを月ひのまみいあまきんよらも

件のうち二卷なる廿六丁廿八丁の歌は日月とか
きされどこれも字は泥むべきは非ずいづれもつ
きひと訓べしさてつきひといふことを常なれど
ひつきといへることハ今世の人ハ耳遠き如し
さればひつきといへる例を出せるよちなみてつ
きひと云る例をもあをせあげてひつきと云つ
きひといふとのかたりをさとせるあり九て古ハ
天地日月をいふときをひつきとのみいひ年月日
時をいふときいつきひとのみ云てきよくうて
り續紀宣命などを考てさとるべしあるを此を

も

三十九 三十九 ^{キム}カハナノニノカキルノコトハニシキルニシテカハナニ
金舞七 ^{ナシ}カハナノニシテカハナニシテカハナニシテカハナニ

こそ

後撰七 ^見カハナノニシテカハナニシテカハナニシテカハナニ

たゞの詞をわけて體言の例

七十九 七十九 ^シカハナノニシテカハナニシテカハナニシテカハナニ
九十八 九十八 ^シカハナノニシテカハナニシテカハナニシテカハナニ
十十三 十十三 ^シカハナノニシテカハナニシテカハナニシテカハナニ
同 同 ^シカハナノニシテカハナニシテカハナニシテカハナニ
十六 十六 ^長カハナノニシテカハナニシテカハナニシテカハナニ
廿十 廿十 ^同カハナノニシテカハナニシテカハナニシテカハナニ

過去のことを現在の詞よていへる例

續紀八 ^詔 ^下カハナノニシテカハナニシテカハナニシテカハナニ
カハナノニシテカハナニシテカハナニシテカハナニ

尾よつゝ詞を第二句の頭よたける例

七十九 七十九 ^シカハナノニシテカハナニシテカハナニシテカハナニ
九十八 九十八 ^シカハナノニシテカハナニシテカハナニシテカハナニ
十十三 十十三 ^シカハナノニシテカハナニシテカハナニシテカハナニ
廿十 廿十 ^シカハナノニシテカハナニシテカハナニシテカハナニ

今三十一 長哥 あぢいもの見せしませしりしつゝすかぬゆめといひつゝ

疑ふべきてふをその例

廿廿 長哥 あぢいもの見せしませしりしつゝすかぬゆめといひつゝ
えいもいよしむなり。上よこそと照してきとく
ること。三格例は出せるごとし。志ハ吉の誤歟と詞
玉緒よいへり。さもあらん。そのもい。歎息辭は添
ころのみあれば。てふをはのどくのひよいあづあ
らず。

五廿 長哥 あら〜姫かみのみことのやうらふすかぬゆめといひつゝ
これを上よあれとあれば。見〜とくくべきをきと

あるハあぢへり。吉ハ志を誤れる歟とこれも詞玉
緒は云り。さもあらん。

同十一 長哥 あぢいもの見せしませしりしつゝすかぬゆめといひつゝ
これを第二句。たや〜となくといとくのせず。久ハ
志の誤ならんといへり。さることあり。十一、四十四
丁。たとのみをきしてやこひん「まそかぢみめふ
〜」よ見てこひまくもあやくとあるハ。上へかへ
りこれを別なり。

三十一 長哥 うまなひつゝ〜
これハなの言いとづらよ重りて。い〜なり。初句。
舊本は馬莫疾とあるハ。吾馬疾を誤れるものよて。
あぢまいとくよや。

ナサナ 君半見 常改 めづら きみ 見んと と びびり その ちうと か の ま な か き つ れ

これを上よそとありてつれとうけとるこがへり
六帖よ「きみ見んとこそとあるを思ふよもとハ君
見常社ミヤトとありけんを社を衣ミヤト誤り、乎字ミヤトを後キミ補
入て、きみを見んととと訓誤れるなるべし。

ナサナ 水尾急 嘉 む こ が の み づ を を る み の あ の こ ま れ あ づ ぐ ち ち よ ぬ し け る べ し

これハそてのあもを歎息の辞よて疑のあもよあ
らばれバ。かのあさなる例とハとがへり。又嘉の目
なれぬ字をの假字よ用ひとりとせんことも、穩
ならずこれみよりて思ふよ。嘉ハ見跡などの二字
を草書より誤りとるあらん。さらバ第二句ハ。ミヲ
ヲハヤミトと訓べし。

ナサナ 長寄 ち ら く も の こ れ び ぐ 國 の 青 雲 の む ぶ ず 國 の あ ま の き こ なる

妾耳鴨 ひとつ あ の み あ も き み よ ぶん あ の み の き み よ くれ バ 云々

これを上のあのあもハらんとうけされバこと
もあきを下のあのあもハれむといひとるよか
なえずこれよよりて思ふよ。吾耳鴨の鴨ハ師字を
とよてありけんを上の妾耳鴨よ見まがへて。ゆく
りまゝく寫し誤れるなるべし。さらバア。レ。ノ。ミ。シ。と
訓べし。○件の餘なハ疑をきまなくあれどその
後よ字を寫し脱し。或ハかきあやまりなどよとる
などのみされバよく古をてらう考へ正して見る
ときハ。もとよしまさしくとがへりを見ゆるハさ
らよあることなし。

てふをはもぢへるよ似たる例

ササノ あかぎのくまじふくまじのきかひらぎともあかよなきー 曹母波由

これを詞玉緒よてふをはとぢへる歌の中よ入て
上よぞとあればゆると結ぶべきをゆと結びとる
とるもとらえどと、のえずといへり。これハ元
来を辞のぞと見とるよりてふをはとぢへりと
たもへるハ、さることあり。そもく本居氏ハてふを
はのまぢこまのよ味ひて。くまなく考へるこゝ
る人かれど此歌昔よりその詞のてふをはとらぬ
ことまで考へいとりとる人ひとりだよなあり
がゆゑよなをそれよならひて。件のごとくハ云る

ものあり。さるハ万葉をよき歌とてえり出とる集
よもあらずあぢきくよ志とぢひ見るよつけて。か
きあつめとるふみなるうらまわくハ。てふをはを
とりをづいて。あやまりとるも。中よをまどりてあ
らんもさることあり。と人皆思ふことなれど。そハ
古よくをーらざるがゆゑよ。志の思えること
もある理あり。但し東歌ハ。京人の小くらふれば。い
とく異なるいひざまもたわく。中よをいやくげあ
る詞もまどれまど。てふをはのど、のひよいとり
てい。とぢへりとおもえる。ハさらよ見えすいで
や。てふをはのど、のひハ。天地のをとめより。言靈
のちをひよよりて。定まれるものよ。有ければ。こ

とさちよいせざれどもおのづからよくとくのち
りていやしき東人の詞よをら露あやまてりと見
ゆることなうりしをや詞のどくのひくづれみど
れていとみどりなることたわゆる世ようまれあ
ひとるハ言の葉此をぢあきらめ得たりとたもひ
ゆるせる人をらどもをればらうをづいてあやま
つことのあるならひなればそをもて寧樂の朝の
詞よなすらふべきよあらずさればさむありいや
しき東をとこあづま女よいさるまで人をしへざ
れどもよくとくのちりてありしことなればいあ
でのとりをづいていふべきよのあるべき九十
八丁浦島子をよめる長歌よむるの日此かをめる

ときよ云くいふしへのことぞれもわゆ云くとも
見えさればそを見て古ハ上よそといひてゆとう
くるとぐひもをりくハありしを今京よりこのち
とことむづらひくハいくなれるふよりてふそ
はのどくのひさごまりてみどりあることなくあ
れるものなりとふとおむひよらむ人も有べしこ
れも所念とかきさればことそれもわゆると訓べ
きを後よ訓誤りとするものなりもとよりよみ人の
とりをづしとるよハ非ず躬恒集よこのまより風
ふまがひてふる雪も春くといへむ花のとぞ見ゆ
と有とぐひハ古き歌のあしく訓るあどを例と
ていひとる歎又ハゆくりあくとりをづいていへ

るよもあらん。前よもいへるごとく。万葉よりあ
この世よ。ことさらよ心せざれども。おのづら
よくのちりたるを。や。今京よりこゑこのハ。
おわくのきぐれたる人。ちの打よりて。か。古今
などの如く。ふろく古を考へ。つねて。きよくえら
べる集などこそあれ。ひとり立たる家集などよ。
そやく彼頃ハ。か。るあやまちも中よまどね。ど。
万葉あるハ。それとときよくことかそねり。但し集
中をくりあへし見るよ。あ。るくいあふぞや。か。ど。
あ。る。ふ。もまどらぬふ。もあらぬ。ど。詞ふるく
て。後の世の人。れ。口づのざるより。見る人の聞のあ
くきもあり。さ。あらぬハ。前よ出せる偏格の例よ多

くハ。え。づ。れ。ず。その中舊き印本よハ。後よ字を寫し
誤。或ハ。う。つ。脱。或ハ。よ。み。と。が。へ。る。か。ど。も。
く。さ。ぐ。あ。れ。バ。あ。り。本。の。ま。よ。て。ハ。ひ。と。を。ら。と。
のみが。と。き。こと。お。わ。ら。る。を。字。の。あ。や。ま。れ。る。お。ち
と。る。な。ど。ふ。ろ。く。考。へ。訓。さ。ま。を。も。く。ハ。く。正。し。て
見。る。と。き。ハ。も。と。よ。り。ま。さ。し。く。と。が。へ。り。と。お。も。え
る。ハ。百。よ。つ。も。あ。る。こと。な。し。これ。あ。れ。後。の。集。の
あ。や。ま。り。あ。る。と。ハ。こと。か。そ。り。と。る。あ。る。し。あり。こ
れ。ふ。よ。り。て。雅。澄。つ。ら。く。右。の。歌。を。考。る。よ。そ。も。は。ゆ
ハ。お。も。ほ。ゆ。と。い。ふ。こと。あ。る。を。東。語。よ。あ。い。ひ。と
る。あり。泣。し。所。念。と。い。ふ。こと。あ。れ。バ。い。さ。の。難。め
る。こ。ろ。な。し。は。お。も。ひ。よ。れ。る。ハ。あ。い。う。え。た。と。さ。

し。を。せ。そ。と。い。古。い。親。く。通。え。し。云。と。り。と。お。ほ。え。て。
雨。を。春。雨。小。雨。ま。ど。い。ふ。と。き。い。さ。め。と。い。ひ。稻。を。和。
稻。荒。稻。ま。ど。い。ふ。と。き。い。ね。と。い。ひ。棄。を。を。つ。と。も。
い。ひ。兄。を。せ。と。も。い。へ。る。類。あ。れ。ば。思。を。も。そ。も。ふ。と。
も。通。え。し。云。り。し。よ。こ。そ。自。カ。乏。く。て。お。の。が。聞。の。
あ。し。き。よ。い。心。つ。ら。む。て。と。も。を。れ。ば。古。人。よ。き。ぞ。つ。
く。る。こ。と。の。お。ほ。う。る。こ。そ。う。れ。と。け。れ。

九。十。子。か。その。せ。の。よ。ぎ。つ。を。見。れ。ば。玉。も。あ。ち。り。み。ど。れ。る。この。そ。と。め。も。
これ。を。ら。も。二。重。り。と。る。ど。の。ひ。が。と。し。と。詞。玉。緒。
よ。疑。ひ。お。き。と。る。こ。と。な。れ。ど。よ。く。考。れ。ば。中。く。よ。い。
う。が。なり。玉。も。ら。も。い。玉。藻。よ。ハ。非。ず。玉。歎。と。う。と。が。
へ。る。詞。つ。き。る。り。歌。の。意。ハ。河。瀬。の。激。り。落。る。を。見。れ。

バ。ま。こ。と。の。玉。の。散。乱。れ。て。あ。る。歎。も。い。ハ。此。河。門。の。
水。玉。歎。さ。て。も。い。ふ。の。し。や。と。両。方。よ。う。と。が。ひ。て。よ。
め。る。な。り。上。ハ。先。河。瀬。の。水。玉。の。と。ぎ。り。あ。る。こ。と。を。
治。定。し。て。見。お。き。て。さ。て。ふ。と。び。う。と。が。ひ。て。これ。
と。い。の。さ。ま。真。の。玉。よ。て。あ。ら。ん。歎。水。玉。よ。て。あ。ら。ん。
歎。と。あ。や。し。め。る。け。し。き。よ。い。ひ。な。し。と。る。な。り。

廿。五。下。から。こ。ら。も。ま。を。よ。ご。う。つ。き。な。く。こ。ら。を。た。ま。き。て。ぞ。き。ぬ。や。あ。む。し。は。て。
これ。を。上。よ。ぞ。と。あ。れ。を。き。ぬ。る。と。こ。を。い。ふ。べ。き。を。
ぬ。と。の。み。云。る。い。う。が。あ。り。や。ハ。あ。る。も。な。き。か。て。小。
を。は。の。じ。の。ひ。よ。い。あ。づ。ら。ぬ。こ。と。あ。れ。を。な。り。
あ。れ。れ。ど。も。これ。ハ。後。よ。留。字。を。脱。寫。し。と。る。よ。も。あ。
ら。ず。又。ゆ。くり。か。く。ど。り。を。づ。て。云。る。よ。も。あ。ら。ず。

東人の一の詞くせよて、ぬるをつづめて、ぬとのみ
云ることありしがゆゑあり、その例次よあぐる
を見て知べし。

西十 をつづものぬるよつづあひまをさるなりぬ。をまねてんのも
これも數多かりぬるをといふことあるをぬるを
つづめてぬとのみ云とるなり。

同廿一 あせといふまねあひまをさるなりぬ。あせくる
これも明ぬる時來るといふことあるをぬるを
つづめてぬとのみ云とるなり。

同廿二 ねなきみのみことかかみかかといふまねあひまをさるなりぬ。あひま
これも役ち來ぬるうもといふことあるをぬるを
つづめてぬとのみ云とるなり。

同廿九 ねなきみのみことかかみかかといふまねあひまをさるなりぬ。あひま
これも置て來ぬるうもといふことあるをぬるを
つづめてぬとのみ云とるなり。かくこれのまぬる
といふべきをぬといへること見えされば、今世よ
古こと學ぶともがらのゆくりかくとりをづして
ておをはをあやまれるあぐひまのあらず、東語の
一のいひくせと見てあるべし。志あるを件の廿卷
あるを詞玉緒よておをはとがへる歌の中よ入て、
ぬるといふべきをぬとのみ云るがとがへるあり
と云る。それも下より理はさることよもあれど、
これのまを合見て考るときは、うちまをせて誤と
して論ひがとさきことなり。又集中よ、ありあてぬ

ありぬきかてぬるもとやうふたなくいひとる。こ
れらもよく考るときい。ありかてぬるのもゆきあ
てぬるのもといふことあるをぬるをぬと云とる
あり。これらのかてぬい。難ぬるといふ意あればあ
り。あつるを近き世の古學徒みなあてぬのぬを不
の意と見て、不難のもといふこと、し。さて難ぬる
を不難といふい。後よけしるをけしうらぬとい
ふと同意なりといへる。それも一理いあれど、根源
ぬるをぬとのみいふことありしをなりぬるをあ
りぬ。あけぬるをあけぬといふがごときい。聞よ
らぬがゆゑよ。おのづうらそい東歌よのみつとそ
りて、京人のみい。き。もたよむぬことよなれるを。

ありうてぬるもとやういふをぬるのもといひ
てい。中こよ聞よらぬがゆふよ。いづれもかてぬ
とのみ云とるなるべし。

六帖四

きのききこよひざうりをむびごらぬとよぬとのそでいひづらん

これも件の歌どもの格よぬるといふべきをぬと
いふことのあるよよりてよめるあらん。又これい
うれい。くよぬがぬまの關守などいふ例よ。詞
をそへて、意をきくをる格よて云るふもあらん。あ
不偏格、條合考べし。

六三三

つくとねゆきつむあらういなをのむかかきこらがふぬわよるのも

これやうの言重りていふがなれど、古風の歌よ
例あることよて、そい既くの行部よ出せり。

十三下 うらぶれてなれよーきまをましきまをぎやーとひやみづれこんあも
これいやとらと重やていういかなれど。古風の歌よ
そ例あることよて。これもそやくか行部よ出せり。
これをも詞の玉緒よてふをはとがへる歌の中よ
いれて。上よやといひて。うもと結べるるなハぎと
うちまのせていひとるハくをーららず。

佛足石

いのあるひとよいませういそのうをいつたにぎやあーあつひらうんてんてん

これも右ふ云るよ同。

十四下

かぐとちちちやまのかんおあまのきんのもつたはきあならあくふ

これもやの言重りていふなれど。古風の歌よハ
例あることよて。そやくや行部よ出せり。まづて上
件のごとく。うの重。うとやの重。やの重。などい。例多

きことよて。てふをはとがへるもぐひよハあら
ず。

てふをはの訓を誤れる歌并今京より此方てふをはを誤れる例

四十五下

あぶおもひをひとふちらせやとまうげひらきあけつと夢西所見

これハ上よやとあれバ。ミ。エ。ツと訓ハひがことあ
ふみゆると訓べし。そむく舊きゑり本のまよて
そいらくいふうしきをぢむをりくあることなれ
ど。そハ後よ字をうつし脱し。或ハかきあやまりあ
どしとるものなれバ。これうきをてらし合せ考へ
正して見るときい。もとよいまさくくさぶへりと
見ゆるハ。さらよなきことあり。又字の用ひさまハ。

難みなくよくかなひて見ゆるも訓さまあしくて
ておをはのど、のひをとがへ、中よいかとをら
こきまでおゆるることも、まくならぬを、この近
きせよいこりて、古學みさよりよおこりてより、す
きをきよ訓をもあらとめ正して、そののみよくら
ぶれば、こよなくきいことおまね、世のふるこ
とまよびまる人も、舊き訓のひがことおちき、お
おむねさととりえさることおれば、今さらことおと
らしく舊き本よつきて、さらく論ふべきのぎりよ
あらざめるを、おちきとて、注釋せる集よも
訓あやまりさること、件のごときことおれば、心
つけて考べきことなり。

四季 あそよをいつもあらんをなすとのそのよひあひて事之繁裳
これハ上よかとおれば、そての句、ことのおまげきも
となくて、お、のをぬことなり。コトシシゲシモ
と訓ハ、きをめてひがことなり。

九季 ^{長哥} なるのひけかきめるときに云いおへへの事曾所念云々
これハ上よ曾とおれば、おもゆると訓べきを、オ
モホユと訓るハ、ひがことなり。

五季 かみれつきぎれの常のわがせごや、おもみちをちりぬべく所見
これハ上よとあれを、はての句、ミユと訓てハ、か
なえず、みゆると訓べし。○この餘な、これおれあ
れどうるさければ、おらいつ、なをらへてさとりべ
し、すべて上件よ引出さるごとく、字をも正し訓を

直して考るときいもとよりよみ人の意得あやま
りあるいどりをづいていへるとぐひいさらふあ
ることなし。今京よりこなとい言の葉のすぢよく
意得とりとたもへる人もをりくあやまつことの
あるい詞のどゝのひのみどりがはいくなれる世
となりぬるららゆくりかくとりをづすことであ
るからひなりその證なわ左にいふべし。

古今十ほとぎは峯のこもやまやふい「あつとまきけで見らよ」もなき
これを上よぞのや何等の言なくしてきと留れる
とゝのそぞ。

後撰六 あぢれとふことこつひの口ばをかかるとやひとをわひなるらん
これこそこの言をうけとる詞なけれむとぞのそぞ。

拾遺六 かきつくるころ見えあるあとなれど見ても心のんひとああるとて
これそぞのや何等の言なけれむかきつけつと有
べきをくるとあるそとゝのそぞ。

同十一 われこそや見ぬ人こころやまひされあひさうぞいやむ薬なり
これそやの言落つあず。

菅万 わが身をびひとら朽木まなすこれちぢけ春よもあへるかひあ
これそやの言とゝのそぞ。

同 ちら雪の八重ふりけるかへるやまのへるくぞたいよけらうな
これいぞの言とゝのそぞ。

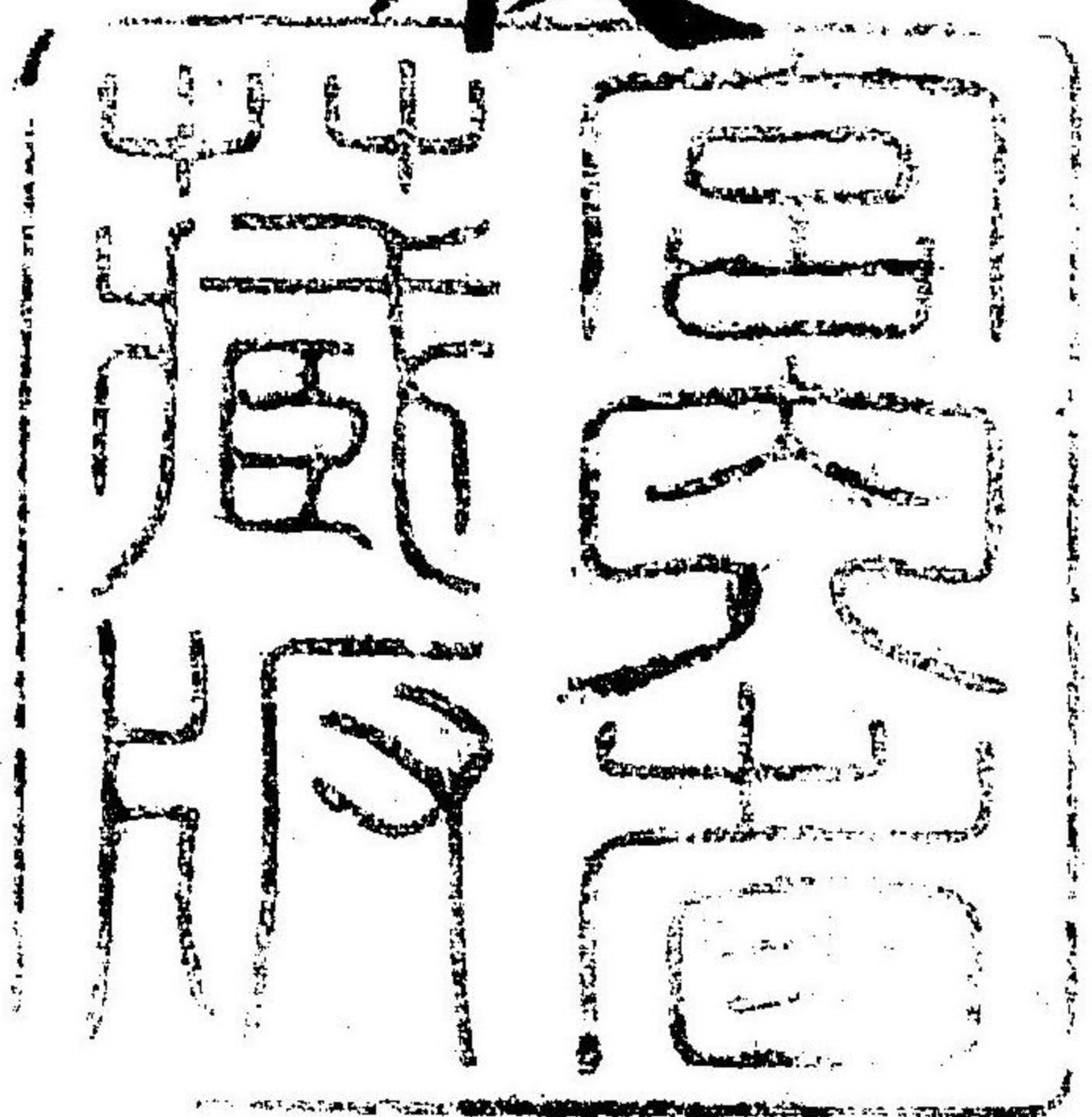
六帖五 ちらまづあづま路よりぞ若くこのころをつてよむさう野の風
このぞいかの云残りて言をふくめらるぞよても
あらんあされど落着ず聞ゆるなり。

躬恒集 このまより風よまがひてふる雪もさるくといへむ花うとぞ見ゆ
これハ上よぞとありて見ゆとうけさるとがへり。
○上件のごとくてみををあやまれること。三代
集の勅撰よまら見えとればその後の撰集まいて
家々の集などい思ひやるべくそしくハ詞の玉
緒よ載さるを見て知べし。これらを万葉ある歌を
のちみ字をうつしあやまりたとしあるハ訓とが
へなどしとるさぐひとハさまかきりてよみ人の
みづらら意得さぐひあるハ心しとる人もゆくり
なくとりをづしてよめるまどなり。さるハさきよ
もいへるごとく。万葉よりあふさそ。ことさらよ心
せざれどもたのづらふよくさるのかりて。かり

よもあやまつことなうりしを。今京となりてよ
後ハやゝ詞のどいのひくづれまがひて。よく心せ
ざれむをぐれとる人もゆくりなくとりをづして
物することよかれハばぞうし。これよても言とま
のさへなるをぢい古よのみありて。やゝ後ハを
きすきよみやびことの物うとくなれるを。おもふ
べし。

明治廿六年十一月廿八日印刷
同 廿六年十二月一日發行

宮内省藏版



印刷人

吉川半七

京橋區南傳馬町
壹丁目十二番地

